りびんぐらいぶず　令和2（2020）年7月第2号

略讃聞名と広讃聞名と

◆ご讃題

十方恒沙の諸仏如来は、みなともに無量寿仏の威神功徳の不可思議なるを讃歎したまふ。あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと乃至一念せん。至心に回向したまへり。

（Ref『仏説無量寿経　巻下』註釈版 P41）

◆はじめに

このほど、あるお方から「聞名」についてネット上で検索すると昭和二十四年発行のコンテンツ「広讃聞名」と「略讃聞名」が先頭にヒットしてきたとお聞かせに与りました。それ自体大変有り難いことです。

◆物語をきくことと、ありありと聞くことと

「聞名」とは、第十八願成就文の「その名号を聞きて」信心歓喜する（お救いに与る）の「その名号を聞く」を指します。

「その名号」とは何かと言えば、第十八願成就文に先立つ第十七願成就文に「十方恒沙の数限りない世界の諸仏如来がみなこぞって無量寿仏（阿弥陀如来のこと）のお徳の不可思議なることを讃嘆したまふことであることが判ります。諸仏如来の名号讃嘆です。

無量寿仏のお徳を縷々お讃え遊ばす名号讃嘆です。縷々お讃え遊ばしますのでこれを古来、**広讃**（こうさん）と称するのであります。

十方恒沙の世界の一つが人間界であり、人間界の如来は、お釈迦如来でした。お釈迦様が縷々お説き下さった無量寿仏の威神功徳の不可思議なるを讃嘆なさる経典は仏説無量寿経（大経）ですから、大経に説き明かされた仏願の生起本末の一部始終をお聞かせに与ることが聞（名）だということになります（Ref「信文類」（末）現生十益直前のご自釈、註釈版 P251）。

一部始終をお聞かせに与るとは、名号を聞かしめてお救い下さる阿弥陀如来のご本願の**物語を聞く**ことだということができます。

けれどもまた、親鸞聖人は、南無阿弥陀仏を称ふるは仏を誉めたてまつるになるとなりと仰せ下さいました（Ref『銘文』註釈版 P655）。お念仏が仏徳讃嘆になるとおっしゃったのです。

煩悩具足の凡夫が称えるお念仏がどうして仏徳讃嘆になるのでしょうか。

それが可能になるのは、称名自体が如来回向の口業であり、口業は讃嘆だったからです。

だから、お念仏することを**略讃**と申します。

南無阿弥陀仏と称えれば直ちに南無阿弥陀仏のお名号が聞こえて下さいます。

私が称えているように見えてその実は、阿弥陀如来のご本願の思し召しのままにお取次ぎをし、お聴聞のお同行はまた、まことに殊勝にも素直に南無阿弥陀仏とお称え下さったのですから、聞こえて下さった南無阿弥陀仏は、たった今し方お浄土を発して、衆生の両の耳を揺るがせ、わが胸底に届いて下さったお名号そのものに他ならないのであります。

南無阿弥陀仏のお名号は、ご本願叶って仕上って下さったのですから、お悟りを完成された阿弥陀如来の本願招喚の勅命であります。阿弥陀様が本願のお心から私を喚び覚まそうとして喚び続けていて下さるお喚び声であります。だから、**略讃**とは何かといえば、私を喚び覚まそうとなさるお喚び声を**ありありと聞かせて戴く**ということになります。

まことに聞其名号とは、如来様が衆生をお救い下さる一部始終の「**物語を聞くこと(広讃聞名)**」であり、如来様が唯今ここで私を喚び覚まして下さるお喚び声を「**ありありと聞くこと(略讃)**」だということになります。

◆乃至十念の仏意

では成就文では聞其名号せしめることによるお救いなのに、どうして、願文では「聞其（我）名号」ではなく「乃至十念」なのでしょう。

それは、聞我名号では、どのようにして名号をお聞かせに与るか衆生を育てる具体的手段が明らかではないからだと窺われます。

願文の一つの性格は衆生往生の願ですから、衆生の聞を招来する行動として成立する仕組みが担保されていなくてはなりません。

そこで、十方の衆生に間違いなく名号を聞かしめる為にはどうすればよいか、如来様はお手許で南無阿弥陀仏と称えて御覧遊ばしました。すると称えれば南無阿弥陀仏と聞こえるではありませんか。かくしてお手許で確認済の口業を本願力によって回向していて下さるのです(Ref『行巻』「大行釈」註釈版 P141)。

だから、親鸞聖人は、行巻で、「大行とは無礙光如来の名を称するなり」と仰せ下さったのです。これは、言外に主語を秘めた日本語の特徴により、称する主語は、如来様と衆生の双方に

関わることになります。

かくして、如来様の思し召し通りに、南無阿弥陀仏と称えれば、直ちに仏の口業が私の上に於て働いて下さることになるのでした。

では、実際に称えさせて戴きましょう。称えれば、直ちに聞こえて下さったものがある筈です。何と聞こえて下さったでしょう。南無阿弥陀仏と聞こえて下さったのです。

◆教行証の三法題と教行信証の四法題と

してみれば、お名号をお聞かせに与るみ教えがあり、み教えに従って称えるお同行が居り、称えれば直ちに聞こえて下さるお名号が衆生の両の耳を揺るがすという体験を開く人が居ると言う意味で、教行証がそろっているのが浄土真宗であります。

親鸞聖人は、本願力廻向の名号をお聞かせ戴きお救いに与って行く上では、如来様の仰せに疑いを差し挟まないという「信」が極めて重要であるとして、教行信証という四法題でお示しになりました。まとめますと、

一）**教え**とは、名号をお聞かせに与ることによってお救いに与ることであり、

二）**行**とは、仰せの通りに（実は、これが浄土真宗の「信心」を指します）、

①南無阿弥陀仏と称えることであり、実際に、称えれば直ちに聞こえて下さる勅命を**ありありとお聞かせに与る**（**略讃聞名**）のであり、そのお謂われについては②仏願の生起本末をお聞かせに与る（おいわれを聞く＝**物語を聞く**）こと（**広讃聞名**）になるのであります。合掌

◆仏教壮年会お聴聞の会八月二日(日)二十時より
◆八月度は仏婦例会はお休みと致します。
◆正覚寺歓喜会　八月二十二日(土)十時より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥